

エイコーンとイデア—序説

——ヨーロッパ形而上学の読み替えのために——

山 川 偉 也

0 私は、そのとき、ミレトスの古代劇場の廃墟の上に立っていた。アナトリアの鋼青色した空を、そして見渡すかぎりの綿畑の上を、遥かにエーゲ海から、北東の風が吹き渡る。

地上30メートルの高みに、わずかに風を避ける窪みを見つけ、葡萄酒をがぶ呑みしながら四周を見渡せば、南にはアルカイック時代のアクロポリスのあった平たい丘 (kalabak tepe) が盛り上がって見え、東のほうには獅子の港、デルフィニオン、北のアゴラ、ブーレウテーリオン、南のアゴラ、ギュムナシオン、ニウムフェイオン等の遺構を、白い、あるいは薄赤い綿花によって彩られた茫漠たるアナトリアの平原がおし包んでいる。

マイアンドロス河をはさんでプリエネの南に位置する古代ミレトスの跡、この地を私はどんなに憧れたことであろう。この地こそは、タレス、アナクシマンドロス、アナクシメネスなど「最初の哲学者」たちが、生きて活躍した当の場所だったのである。たくましい生活人でありながらも、一般の人々よりも「見ること」 (θεωρεῖν) に徹底した彼等は、あたかも劇場の最上階に席を占めて、舞台の上で進行するドラマを俯瞰する人のように、飽きることなく、天上から地上に至るあらゆる現像の中を貫いて走る一本の筋書、さらには、その筋書を筋書たらしめている「元のもの」 (ἀρχή) が何であるかを、恐るべき洞察力をもって観取したのであった。

ミレトスにおいて世界ではじめて生まれた「哲学」とその爾後の運命について思いめぐらすうちに時は過ぎ、寒さに我に返った私の身の回りに、暮色と

影が迫りつつあった。遥か遠くアテナー神殿の遺構のあたりは渺としてすでに暮れなずみ、湿地の上に点在するここかしこの廃墟の石材にも、セピア色した影がまといつき始めていた。

1 この短い論考において、私は、ミレトスの劇場の最上階にあって瞑想したことの一部を、引き続き改めて考察する。

そのとき考えたことというのは、ヨーロッパの「愛智」(φιλοσοφία)の営みが、その「理論活動」(θεωρία)において、「影」を機縁として興りつつ、次第にそれを抑圧・抹殺する方向へと歩を進めて行ったのではないか、ヨーロッパ的思考に特徴的な「理性」の顕彰は、他面で、理性に対抗する非理性的要素の体系的歪曲化を発条として行なわれてきたのではないか、というようなことであった。

ヨーロッパの形而上学、事実それは、「影」の熟視から生まれたのである。M. セールは、西欧的思惟の原形的人物、BC 585年 5月28日に起こったとされる日蝕を予言し、さらに別の伝承によればピラミッドの高さを測定したといわれるタレスに関連して、次のように言っている。¹⁾

「太陽がその痕跡を残す砂土は、スクリーン、つまり地下の洞窟の奥にあって影を映す壁に等しい。これこそ、西洋の知にとって、千年にわたり据えられた表象の舞台であり、例のピラミッドの熟視と、歴史的に変わることのない形態なのだ」

2 タレスが熟視した影、それは射影幾何学の、表象の遠近法の、「記号」であった。ヨーロッパの知性は、事実、「影」から生まれたのだ。いやコスモス、人間的秩序の体系、世界そのものが、「記号としての影」の熟視から生まれてきたのである。

グノーモンのまわりをめぐる影²⁾、退いてゆく海の痕跡³⁾、舟を浮かべ揺れ動く

海原の波の形⁴⁾、天空を吹き過ぎ、雲を払い、プラタノスのざわめく梢に感知される風の息吹や鉄床の上で鳴り響くリズムカルなハンマーの音⁶⁾、これらを実在から送りだされた記号として読解することのなかから、次第に、そして確実に、秩序ある世界体系としてのコスモスが誕生してくる。

3 ヨーロッパの知は「影の知」として始まった。だが、やがて、「知」は「影」から分離する。それは純粋な光の体系、実在を透視する力となり、実在を照らし出す「太陽」の地位を占めるに至る。測定するひとタレス、その前のピラミッド、ピラミッドを挟んで対極にある太陽と影、という図式。この図式は新たに「価値」の次元を加えて編成し直され、水平の軸を垂直の軸へと変換して、いまや逆転するに至る。

太陽を含む自然的世界は、太陽的知性（神的理性）のポイエーマ（製作物）、そのエイコーン（εἰκών）となる。こうして、「影」は「影の影」となる。

4 影の影が支配する影の世界。人間の出自はそこにある、とされる。このような判断がいかに偏見に充ちたものと思われようと、啓蒙の時代を中心とする近世ヨーロッパ的知の地平を回顧するとき、概して、この判断は正しいのである。だが、知の暴力、啓蒙（Aufklärung＝上方へ、光の方に向かって明きらめること）の暴力は、そもそも、人間的知の故郷である影を、二重の影として幽閉するいっそう根源的な暴力に由来する。

影の領域、それは、一に対する多の、情報に対する騒音の、真理に対する虚偽の、聖に対する汚れの領域だと理解される。それは、「ふたつ頭の怪物がうろつきさまよう」迷妄の国⁷⁾、暴力的反乱と騒擾の結拠する場所⁸⁾、光を遮蔽する男根⁹⁾、子供を呑み込み隠す咽喉¹⁰⁾、牛頭の怪物が棲息する洞窟¹¹⁾であると理解される。

「洞窟とは、闇が明るさの『自然的』な対立物であるように、単純に光の

反対世界であるのではない。洞窟の世界は自然的な光と暗黒の領域に対する一つの『作為的な』というかまさしく暴力的な地下世界であり、遮蔽と忘却¹²⁾の地域、存在の代用物と派生物の領域である。

5 かつて私は、カルキディケ半島のムーダニアに旅し、貧しい土地の住民が羊を牧して漂泊するペトラロナの丘陸地帯に、地下世界からの「ためいき」が洩れでてくる洞窟を訪ね、そのなかに深く降りていったことがある。そこはおよそ70～80万年の昔、太古の人類 (*archanthropus europaeus petraloniensis*) が棲息していた場所であった。200メートルの地下、入り組んだ迷路の果ての、暗く冷えびえとした鍾乳石灰岩の平たい窪みに草でしつられた床のうえに、生を終えたひとりの男が身体を折り曲げて横たわっていた。¹³⁾

6 おのずからプラトン『国家』篇第7巻における「洞窟の比喻」が想起された。洞窟の底に、生まれたときから、捕らわれ拘留されたままの囚人。その囚人こそ、われわれ人間の姿なのだと、ソクラテスは言う。

「地下にある洞窟状の住居のなかにいる人間たちを想い描いてもらいたい。光明の方に向かって長い奥行きをもった入り口が、洞窟の幅いっぱいを開いている。人間たちは、この住居のなかで、子供のときからずっと手足も首も縛られたままなので、そこから動くこともできないし、また、前の方を見るばかりである。縛めのために頭を後方へ廻らすことができないのだ。彼等の上方はるかなところには、火が燃えていて、その光が彼等の後方から射し込んでくる。この火と囚人たちの間、うえのほうに、ひとつの道に沿って低い壁のようなものがしつらえられているとしよう。……その壁に沿ってあらゆる種類の道具とか石や木やその他いろいろの材料で作った、人間およびほかの動物の像などを壁の上に差し上げながら、ひとびとが運んでゆく、……運んでゆく人々のなかには当然声を出す者もいる。—奇妙な情景のたとえ、

奇妙な囚人たちの話ですね—われわれ自身によく似た囚人たちのね」¹⁴⁾

これは、まさに影絵の世界である。

7 影を凝視する囚人に暴力が介入する。彼は手枷・足枷を外され、むりやり、射しこんでくる光の方へと向き直され、きらきらと輝く火の方に向かって引きずりあげられる。囚人の眼は盲いる。難渋な旅が始まる。険しい上向の道を辿り、その果てに彼は外界にでる。彼の眼は、ここでもまた、厳しい試練に会う。天界に照る太陽とそれが照らしだす自然の物象を、彼はただちに見ることはできない。「まず最初に影を……次に水のうえに映る人間その他の写像を」見ることによって、眼を慣らしていかなければならない。

プラトンがここで語っているのは、「人間の教育」、とりわけ「哲学教育」である。哲学者は、長い訓練を経て「影」の世界を遠ざかり、真の實在、「善のイデア」を見るに至る。そして再び洞窟の中へ、影の国へと下降してゆく。囚われの仲間たちを、その桎梏から開放するためである。しかし、このとき、不思議なことが起こる。光の国から影の国へと踏み入れるとき、彼の眼は、ふたたび「暗黒」に充たされる。彼の眼は、もはや何物をもはっきりとは判別しない。そのようなとき

「ずっとそこに拘禁されたままでいた者たちを相手にして、もう一度例のいろいろな影を判別しつつ争わなければならないとすればどうだろう。……彼は失笑を買うようなことにならないだろうか。そして、ひとびとは彼について、あの男は上へ登って行ったために、眼をすっかりだめにして帰ってきたのだと言い、上へ登って行くなどということは、試みる値打ちさえないことだと言うのではなかろうか。こうして、彼等は、囚人を開放して上のほうへ連れて行こうと企てる者に対して、もしこれをなんとかして手のうちに捉えて殺すことができるならば、殺してしまうのではないだろうか—ええ、き

っとそうすることでしょう」¹⁵⁾

8 ここでは比類のない想像力が、「啓蒙」行為の危険を描写している。だが、その同じ想像力はまた、光の中に踏み入ることと闇の中に踏み入ることの機能的等価性を遺憾なく描写してもいる。光からの帰郷者としての哲学者の混乱と奇妙な（アトポス＝場違いな）ふるまい。失笑の対象となる彼の眼力。しかし、悔ってはならない。彼の視覚が闇に慣れ、その中にうごめくものをはっきりと識別するとき、彼はそれを、もはや、「影の影」としてしか認知しないからだ。彼は、これより以降、それを「非存在」と呼ぶであろう。実際、その存在性は、かろうじてただ「記号作用」によってのみ許容されるにすぎない。それは何かを指示し、その何かを指示するという役割ゆえに無に瀕した存在性にすぎりつく。しかもそのとき、記号作用の媒体として、それはみずからを透明化しなければならないのである。

9 啓蒙行為の危険、闇の世界から自らをもぎ離し、光の中へと突入し、やがては光そのものの視線となって万物を照明するということの危険、その危険から「最初の哲学者」達といえども免れてはいない。ヘラクレイトスやパルメニデスの大衆に対する侮蔑を込めた尊大な発言は、「知」が、すでにまぎれもない純粹理性としてのロゴスを指向していることを示している。¹⁶⁾

しかし、概して、ミレトスの哲学者たちは幸せであった、と私は考える。というのは、彼等の思考の原点は、彼等の日々の生活そのもの、アゴラを中心としたポリス生活そのものにあったからである。ポリスにおける政治的・社会的経験こそは、彼等の大胆不敵なコスモロジーの不断の源泉であり、「平等」・「均衡」・「相互性」というポリス生活を支配する水平的分節原理は、そのまま彼等の思考のモデルであった。¹⁷⁾円錐の頂点として万物を見下ろす純粹理性ではなく、最高の賢者に捧献される鼎が、アゴラを、ポリスを、ぐるりと一巡する「中心をもった円形のコスモス」こそ、彼等の構想した世界観の理想的モ

デルだったのである。

10 プラトンの「洞窟の比喻」が如実に語るところは、少なくともプラトンにとって、当時のアテナイの現実たるやすでに、「影」にたぐえられるみじめなものにすぎなかったということ、そして、それを改革するための原理ないしモデルを、彼は、地上世界のいかなるところにももはや求めることができなかった、ということである。

無常迅速、転変きわまりなく移り変わる地上の制度などは、プラトンにとっては、もはや何の頼りにもならなかったのであって、万物を超越する「善のイデア」とそれによって統率されるイデア界だけが、ソクラテスを殺してしまうようなデマゴグの支配する無秩序混乱の祖国に再び活を入れることができる、と考えられたのである。

11 プラトンの「イデア論」なるものは、アリストテレスの第一哲学（*πρώτη φιλοσοφία*）とは異なって、単なる存在論といったものではない。その出生においても、その狙いにおいても、徹頭徹尾政治的である。

そもそも、彼の思索は、ソクラテスの遺業を継いで、倫理的概念を「問答方式」によって定義しようとすることから始まった。「問答」と「定義」、この奇妙な組み合わせは、爾後、「無知の知」の自覚をうながす教導手段として、西欧の学校哲学の強力な伝統を形成する。が、注意しなければならないのは、それがきわめて危険なものであったということである。

「問答」は、その主導者がすでに一定の教説を秘めているのであればドグマの開陳の場所となりがちであり、また、もしそうでないならば無秩序なおしゃべりになり果てる恐れがあるというだけでなく、「～とは何であるか」という問いそのものが、その問いのもつ「浄化作用」のゆえに危険なのである。

12 社会生活上、倫理上重要なキー・タームを定義すること、このこと自体は、

ないがしろにされるべきようなことではない、と人は主張するであろう。実際、その主張は正しいものを含んではいる。例えば、「死」や「死の瞬間」を定義することはただちに、「臓器移植」をどう考えるか、「植物人間」をどう処置するかといったかたちでわれわれの生活に響いてくる。しかし、完全に明確でない概念が明確にされないかぎりはその概念に基づく判断は留保されねばならないとするような考えはときにはきわめて有害でありうるとともに、明確さを求めること自体が有害だということがありうるのである。

問答方式で定義をもとめるソクラテス・プラトンの探求の仕方を、われわれは、「ディアレクティケーの雑音排除方式」と命名することができるであろう。プラトンの対話篇は、さまざまな対話者を描きだすが、その問答の過程において、二人の対話者は、一様に、とびかい錯綜する議論のなかに、多様な内容をひとつに集約するひとつのアイデア、エйдスを見出そうと努力する。書き表され、言い表されるその都度の記号や言葉にどうしようもなくまといついてくる線のふるえや声のふるえといったものをひたすら排除しつつ、「雑音」のなかでしか、問答は進行しない。その目指す方向は、雑音のなかに浮かび上がる同じひとつのフォルム、ひとつの抽象的な対象のクラスを掬い上げることである。こうして、ひとつの概念を定義するとは、それがまとっている雑多性を捨象して、透明なフォルムの世界に移し換えるということである。

13 アイデアは、影の世界から現出する。『国家』523a—524d における有名な「指の比喻」を述べる条りにおいて、ソクラテスは、アイデア存在の必然性を次のように説く。

- (1) 明確で一義的な意味をもつあらゆる語には、明確であいまいでない何物かが関連づけられねばならない。
- (2) しかしながら、それらの語の指示対象は、感覚的事物ではありえない。何故なら、任意の感覚的個物 X については、つねに F とともに非 F が述語づけられるからである。

- (3) したがって、それらの一義的で明確な語の指示対象は、感覚的個物ではなく感覚的ではないものでなければならない。

『メノン』篇 72b—73c においては、同じ趣旨のことが次のように言われる。

- (1) 明確な意味をもつすべての語には「単一」の指示対象がなければならない。

- (2) 個々の事物は多であって一ではない。

- (3) それゆえに、語の指示対象は「多のうえの一」でなければならない。

すなわち、語は、それが機能するとき、つねに何か単一のものに対する命名機能を有するかぎりにおいて機能するのであって、この単一のものとはイデアだというのである。『パルメニデス』篇147d-eは、ひとつの語が発語されるときは、その語が一度だけ発語されるか、何度も何度もそうされるかといったことにはかかわらず、その語はつねに同じものを意味し、その語がそのものの語であるところの当の本性との関係においてその意味作用は機能する、と、同趣旨の発言をなしている。そして同じ対話篇の135d-cは、ひとがもし、こうした本性、諸事物のエイドスが存在することを認めず、それぞれの場合に一定のエイドスを識別することを認めないとするならば、問答するということの意義は完全に破壊されてしまうであろう、と言っている。

14 哲学者の愛知の活動は、「知」と「無知」の中間領域をバックグラウンドとして、対話を有意味なものとするひとつのエイドス、原型イデアに向かってひたすら上昇していく。だが、パラダイグマと感覚的事物との間には、意味論的・存在論的《切断》が走っている。ディアレクティケーの課題は、かくして、この、対角線の不可通約性に類えられる排中の《切断》を乗り越え、架橋し、存在論的に不同で比較不可能な諸項を繋ぎとめる紐帯 (δέσμος) を求めることとなる。

「分有」(μέθεξις) ・「類似」(ὁμοίωσις) ・「想起」(ἀνάμνησις) の説が登場してくる所似である。だがパラダイグマは、それがパラダイグマである

かぎりにおいて、その射影の「場」を、かくして「コーラ」(χώρα)を要求する。振動する無秩序の空間の上に映し出されては消えてゆくアイデアの影、その「現前」を支えるのは「無限定者」の領域である。

15 このようにして、アイデアの「現前」(παρουσία)の形而上学が出現する。この形而上学こそは、西欧の哲学の伝統のなかで最強・最大のものであった。「ヨーロッパの哲学がもっている全般的な特質を言い表すための最も安全な記述の仕方は、この哲学の伝統の全体がプラトンに対する一連の脚注から成り立っているということである」というホワイトヘッドの有名な言葉は、¹⁹⁾掛値なしのものである。いわゆるプラトン主義なるもののみがプラトンの肩の上に乗って思索したのではない。プラトンの敵たることを公言する唯名論の論客たちですら、プラトンが敷設した学の理想のなにかしかに加担したのであった。

言語に対するプラトン自身の両義的な態度にもかかわらず、彼の哲学は、哲学言語の一義性と明晰性、絶対性と確実性という理想を、ヨーロッパ哲学の伝統のなかに広く鼓吹することに力を与えたのである。實在論的であるか唯名論的であるかにはかかわらず、このような理想は、諸学の基礎づけを課題とする哲学、厳密な学たることをめざす哲学、あまつさえ、プラトンの形而上学を一掃することをめざす論理実証主義のようなものにまで浸透して、それらの言語観を規定したのであった。

16 透明で影を宿さぬ言語とその言語を操作ないし創造する理性へのあくなく執着が、現代までの哲学の大勢を規定してきた。だが、哲学が自身に固有の言語に執着すればするほど、哲学はみずからの無力を露呈せざるをえなかったように思われる。

哲学的言語が自己包括的世界を作り、その世界から現実世界に裁定を与えようとするとき、その言語自身が自己を縛り、みずから捨ててきた影の世界たる現実へと引き戻されざるをえなくなるのである。ここに、self-reflective な

哲学的理性にとっての真正の問題が生じてきたのである。カントールやラッセルが逢着した「集合」論のパラドックスやさまざまな意味論上のパラドックスは、そうした真正の問題であり、ゲーデルの「不完全性理論」が証明してみせたことも、近代的理性にとって何が最も根幹的であるかにかかわる事柄であった。それに対して論理実証主義者たちの「意味の検証理論」のつまらなさは、その原理が、それ自身に対しては拘束力をもたないドグマであったということにある。

- 17 「背景に響く雑音はいかなる中断もないわれわれの知覚の背景であり、永続的な糧であり、ソフトウェアの空気〔メロディー〕である。それは、われわれのメッセージの残りかすであり、下水だめである。熱や質量がなくては生命はないが、同様に空気がなくては熱はなく、また雑音がなくてはロゴスもない。雑音はソフトウェアの空気であり、あるいはかつての物質〔素材〕と形体との関係がまさに雑音とロゴスとの関係なのである。雑音は情報のバックグラウンドであり、この形体の素材なのである」²⁰⁾

「雑音」と「ロゴス」の関係が、アナログカルに、影と真に有るもの、すなわち「エイコーン」と「イデア」との関係にあてはまる。

イデアは闇の中でこそ輝いているのだ。イデア界は閉じられていない。多は常に侵入してくる。

- 18 タレスがピラミッドの下で見たもの、それはまさしく、人間の知力の本源がどこにあるかということであった。人間的知、それはその本性において射影的である。しかし、様々な射影がありえ、射影そのものについてもいろいろな態度決定をすることが可能なのである。だが、ヨーロッパ形而上学は、ただひとつの基礎的射影を固守した。すなわち、すべてのものを透明なものとして自らの前に向かい立たせる“Subjektivität”を基礎視覚とする射影を。しかし、

この基礎射影が今後もなおただひとつ人間的知を独自に規定するものであるか否かは、あらかじめ明らかだというわけでは決していないのである。

- 注1) Michel Serres, "Ce que Thales a vu au pied des pyramides" extrait d' "HERMES II' L' INTERFERENCE" 邦訳「形象の超越性の終わり」朝日出版社『講座—思考の関数2<かたち>の時空系—超越と偏移』1984年4月15日所収
- 2) Anaximandros, DK A1, εὔρεν δὲ καὶ γνώμονα πρῶτος καὶ ἔστησεν ἐπὶ τῶν κιοθήρων ἐν Λακεδαίμονι κτλ. DK A2 γνώμονά τε εἰσήγαγε κτλ.
- 3) Xenophanes, DK A33, ὅτι ἐν μέσῃ γῇ καὶ ὄρεσιν εὐρίσκονται κόγχαι κτλ.
- 4) Thales, DK A15, ait enim terratum orbem aqua sustineri et vehi more navigii mobilitateque eius fluctuare tunc cum dicitur tremere.
- 5) Anaximenes, DK A17, νέφη μὲν γίνεσθαι παχυνθέντος ἐπὶ πλείον τοῦ ἀέρος, κτλ.
- 6) Pythagoras, Iambl. V.P. 115ff. παρά τι χαλκοτοτυπεῖον περιπατῶν ἐκ τινος δαιμονίου συντυχίας ἐπήκουσε ραιστήρων σίδηρον ἐπ' ἄκμονι ραιστήρων καὶ τοὺς ἥχους παραμῖξ πρὸς ἀλλήλους (συμφωνοτάτους) ἀποδιδόντων, πλὴν μιᾶς συζυγίας. イアムブリコスの伝えるこのピュタゴラス伝説に対して、その実験による確証不可能性が指摘されている。M. Mersenne, *Questions harmoniques* (Paris, 1963) 166 (Schuhl, *Essai* 262. 2; Capparelli II 627) van der Waerden, *Hermes* 1943, 170ff; H. Opperman, "Eine Pythagoraslegende," *Bonn. Jb.* 130(1925) 284—301. もちろん、しかし、ここでの私の論点は、ハンマーを用いての実験をピュタゴラスが実際にやったかどうか、といったことには関わらない。また、鍛冶工と音楽魔術との間にあった密接な関係といったものにも関わらない。ハーモニーの数的把握への道が、ある日ある時、ピュタゴラスないしは誰かに、イアムブリコスがピュタゴラスについて伝える逸話に類いした仕方で思いつかれたことがありうる、ということでのよいのである。なお、Walter Burkert, *Lore and Science in Ancient Pythagoreanism*, Harvard University Press Cambridge, Massachusetts, 1972, p375ffを参照。
- 7) Parmenides, DK B6, δίκρανοι.
- 8) ヘシオドスの王権交替神話のモデルとしての『エヌマ・エリシュ』あるいはヒッタイトの『クマルビ神話』のようなものを想起せよ。H. Frankfort (ed.), *Before Philosophy*, pp 182-99, R. D. Barnett, 'The Epic of Kumarbi and the Theogony of Hesiod' *JHS* 65(1945), 100-1を参照。

- 9) Hesiodos, *Theogonia* 176—182
- 10) Hesiodos, *Theogonia* 459—462
- 11) ミノタウロス神話を想起されたい。
- 12) H. Blumenberg, Licht als Metapher der Wahrheit in *Studium Generale*, H. 1957 Berlin p.432—453 生松敬三, 熊田陽一郎訳『光の形而上学』朝日出版社昭和52年40ページ
- 13) 1922年にトルコから追い払われた 150 万人のギリシア人たちのうちに、ペトラロナの地に定住するに至った人々があった。Philippos おじさんもその一人であった。1923年にこの地に定住して以来、彼の生計は羊を牧することによって立てられた。

この貧しい地方にあっては、それが唯一の生計手段であった。彼の毎日は、羊の群を引き連れて村を出、カチカ山に登ることで成りたっていた。その山地で、彼は、わずかに羊たちの食料となる緑の草を見つけることができたのである。彼はしばしばその山の上に露出している岩に腰を下ろして休息したが、下の方から、かすかな物音がするのを聞いた。それは、「ためいき」のようでもあり地下を走る水の音のようでもあった。また、彼は、冬どきに、雪が山膚を覆っているときに、その場所の雪だけは、他のところのものより早く融けるのを見た。彼はまた、大地に身を傾けて、地下の底から漏れ出てくる温かい息吹きを感じることも出来た。

Philippos の村は、水が乏しかった。一番近い川まで水を汲みに行くために村人は随分と歩かねばならなかった。水に対する村人の需要は大きかった。Philippos は地下に水があると信じた。そこで彼は、村人に説いて、いっしょに山へ行き井戸を掘ろうと提案した。しかし、誰も彼の話を信じなかった。

年は過ぎ去ったが、Philippos おじさんは相変わらず山に羊を牧し、夕方になると村のカフェニオンで地底深く走る水についての話をした。そのような中で何年もが過ぎ去ったあげくに、ついに彼は 6～7 人の仲間を説得するのに成功した。1959 年の春のことである。

1960年 9 月 16 日、村人のある者たちが「猿」のものと信じて洞窟の中から持ち帰った頭蓋骨は、周到な研究調査の結果、今日では、プレ・ネアンデルタール段階のホモ・エレクトウスの一種として比定され、*Archanthropus europaeus petraloniensis* と命名されている (A. N. Poulanos)。

冷たくうす暗い、下降する迷路、「ヨーロッパで最も美しい」と言われる、鐘乳石筈のジャングルのような、このペトラロナの洞窟に私が降りて行ったのは、1982 年 9 月 8 日のことである。200メートルの地下世界の一隅には、*Archanthropus* の個体全体の骸骨が発見された “Mausoleum” があった。身長 155—157cm, 30—35 才の男性の遺体がそこに横たわっていたのである。現在は、その場所に *Archanth-*

ropus の複製が、発見されたときの状態のまま置かれている。

Aris N. Poulanos, *The Cave of the Petralonian Archanthropinae*, A guide to the science behind the excavations. Library of the Anthropological Association of Greece, Athens-Petralona 1982

- 14) Platon, *Politeia* 514a—515a
- 15) *Politeia* 516e—517a
- 16) Herakleitos, DK 22 A1, DK 22 B1, 22 B108
Parmenides, DK 28 B6, 28 B7
- 17) Jean-Pierre Vernant, *Les origines de la pensee grecque*, 1962. 邦訳 吉田敦彦『ギリシア思想の起原』みすず書房, 1970, 131—148参照
- 18) D. L. I Thales, 27以下を参照。「最高の賢者」にまつわるこの話には、いろいろなヴァリエーションがあるが、その最初に掲げられる逸話によれば：

ミレトスの或る漁夫が漁をしていて三脚の鼎を引き上げる。或るイオニアの青年がそれを買いて、ミレトスの人々にゆだねるが、ミレトス人の中では、その鼎の所有者として誰が最もふさわしいかについての争いがもちあがる。最後にミレトスの人々はデルフォイの神託所に伺いを立てる。神の答えは、「知恵にかけて、万人のうち第一人者へ」(τίς σοφίη πάντων πρῶτος) というものであった。そこで、ミレトス人たちはその鼎をタレスに与えるが、タレスはそれを別の者に与え、その別の者はまた別の者へ... というふうにして、ついにソロンにまでめぐりめぐって来たとき、ソロンは、神こそは最高の賢者であると考えて、それをデルフォイの神に捧献する。

カリマコスの伝える別の伝承によれば、タレスからめぐりめぐって再びタレスに帰って来ることになっている。さらに、クニドスのエウドクソスとミレトスのエウアンテスの認めるところとしてディオゲネスが挙げている別の伝承によれば、リュディアのクロイソス王の友人某が、王から、「ギリシア人の最高の賢者へ」(τῷ σοφωτάτῳ τῶν Ἑλλήνων) ということでもらった黄金製の酒杯をタレスに与え、タレスはそれを別の者に与え... という話になっている。

ちなみに、現在の「ギリシア哲学会」ΕΛΛΗΝΙΚΗ ΦΙΛΟΣΟΦΙΚΗ ΕΤΑΙΡΙΑ)のシンボル・マークは、このタレスにまつわる三脚鼎であって、その脚下には、ΤΩΙ ΣΟΦΩΤΑΤΩΙ という文字が見られる。

- 19) P. R., p. 39
- 20) Michel serres, *GENESE*, Editions Grasset et Fasquelle, 1982. 及川訳『生成』法政大学出版局, 1983年, 11—12ページ

(1984. 9. 27 受理)